

浄土

昭和十年五月二十五日
昭和二十四年四月一日
昭和四十九年六月二十五日印刷
（第三種郵便物認可） 毎月一回一日発行
日 運輸省（特別掛承認雑誌）第三二五号
昭和四十九年七月一日発行



第四十

第七号

1974

7

新連載

念仏ひじり三国志 寺内大吉

王 忍

王 忍



還 愚

鎌倉大仏殿高德院貫主
佐藤密雄

愚かに還える。考えて見ると、なんと六かしいことであろう。親に教えられ、師からさづかったことは、みな正しいことであつたのに、私の考えることは、いつもよこしまである。自分で考えても、そうなのであるから、他人から見れば一層のことであろう。さかしらな悪知恵を起させようとの教育は、一度も受けなかつたが、どうも、私には悪知恵が出て致し方がない。とくに老境に近づくに従つて、これではいけないと反省もするが、他人とかわり合つたあとは、心快い反省が少ない。

愚かに還えるとは、すなおになることであらうか。仏教に身器清浄という言葉がある。身もやわからかに、心もすなおに、教えられることは、そのままに受取つて、自分のさかしらな解釈をしないことである。法然上人は「一文不知のくどんの身になし」と仰せられた。親から学び、師から教わつたことを捨てよ、ということではあるまい。すなおに、自分のさかしらを捨てて「念仏せよ」である。

七 月 号



目

次

還 愚……………佐 藤 密 雄

おほん和生活

ウラボン（苦を救う）……………窪 川 信 丈…(2)

お 盆……………新 保 義 道…(6)

特集 極楽と地獄

極楽について……………香 川 孝 雄…(10)

往生要集の地獄と極楽……………三 田 全 信…(13)

絵図『地獄と極楽』……………(17)

アンケート ① 経典に説かれた極楽と地獄について……………(20)

② この極楽と地獄の思想と現代の世相との触れ合いについて

法然上人霊場めぐり……………村 上 博 了…(24)

第八番札所報恩講寺・第九番札所奥院・第十番札所法然寺

選択集講話⑩ 六法諸仏護念篇……………安 居 香 山…(28)

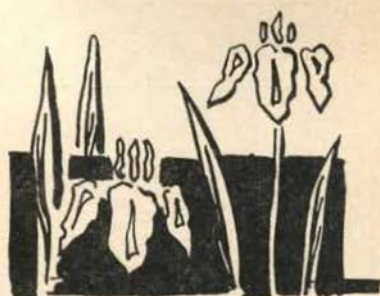
経典に聞くシリーズ⑤ 仏説無量寿卷上……………村 瀬 秀 雄…(32)

念仏ひじり三國志③ 法然上人をめぐる人々……………寺 内 大 吉…(37)

浄土宗の宝物 知恩院経蔵……………佐々木 洋 之…(48)

—表紙 久住静雄 画—

<大正大学美術部絵>



おぼんと生活

ウラボン（苦を救う）

窪川 信 丈

浄土宗東京教区教区長
浅草・竜宝寺住職

お盆とは、インドの古い言葉のウランバーナの音訳で、それがウラボンとなり、ただボンというようになり、さらに「お」の字をつけて「おぼん」というようになったのです。

その意味は「救倒懸くとうけん」といって、さかさにつるされたような苦しみを救うということです。インドでは、日本の梅雨つゆのように長い雨が降りつづく時期（雨季といい三カ月続く）がありますが、その長い雨がからりと晴れあがるのが七月の中頃です。

オシャカさまも、ご説法の旅に出られないこの雨期を、お弟子たちと共に、どこかに「安居あんこ」（おこもり）して、静かに反省したり思いをこらしたりして、お互に修行せられたのですが、七月十五日は丁度その終りの日に当るので、お坊さんたちは信仰上の会議をしたり、法会を行ったらし、信者たちは、この日にお坊さんたちに供養するのは、大きな功德があるというので、お寺にあつまって衣類や食物を布施するならわしでした。

一体、仏教では、この七月十五日こそ、きびしく自分

を反省し、過去のあやまちをサングスすべきであると教えるので、年頭に「今年こそは、くいなき一年を」と決心したのに、それが半年もたつと中だるみとなるので、ふたたびきびしく自分にむちうち、心のねじをまかねばならぬ。その日が七月十五日であるというのです。

風かおる菩提樹のもとに端座せられたオシヤカさまは、こう語られるのでした。

「人の生をうけるはかたく

やがて死すべきものの

いま生命^{いのち}あるはありがたし」と。

このお言葉をよく考えて、まず自分の両親の養育と慈愛とを反省せねばなりません。

さらにこの日は「父の日」「母の日」として、遠く過ぎし世の父母の恩をも考える日です。これが「祖先の日」すなわちお盆といふことでなければなりません。

さて、お盆のいわれですが、オシヤカさまの十大弟子の一人で、神通第一といわれ、孝心の人一ぱい深かったといわれている目連尊者^{もくれんそん}が、ちょうど夏安居中のある日のこと、今は亡き母のおもかげをしのび、「母上は今ごろどうしておられるだろうか。定めし極楽で安楽に暮らしておられることであろう。一目そのお姿を見たいも

の――」

と修行の眼力によってあの世の世界を眺め渡してみますと、こわいかに、母上は餓鬼道^{がきどう}におちて倒懸^{たうけん}の苦しみにあえいでおられるいたわしいお姿が、ありありと目の前に見えるではありませんか。あの慈愛にみちた、ありし日のお姿を思いおこせば、世の中が一べんにまっ暗になったような悲しみに胸つづれ、しばし涙はとめどもありませんでしたが、やがて、

「なんとしても、母上をお救い申し上げねばならぬ」

と思い定めて立ち上ったその足は、おのずとお師匠さまのオシヤカさまのもとへ向わずにはいませんでした。まだ修行半ばで、母上をお救いするだけの力のなかった尊者は、まずみ仏にお助けを乞うよりほかはなかったのです。

そして、尊者がオシヤカさまからいただいたおさとしはこうでした。

「そなたの母は、生前中、貪欲^{とんよく}で人にほどこしすることを知らず、わが子であるそなたばかりを可愛がついた罪のムクイで餓鬼道に落ちたのである。母を救おうと思えば、母の代りに、夏安居の終る七月十五日の日に、僧たちに供養する（主として食物を布施する）がよい。

さすれば、その功德によって、七世の父母までも救われるであろう」と。

尊者は、み仏のねんごろなおさとしに涙を流して喜び、七月十五日には、多くの僧たちにできるだけの供養をしたのです。はたせるかな、その功德によって母上は、首尾よく餓鬼道の苦しみから救われ、きのうに変わるきょうの母の笑顔、極楽世界に見出すことができたのでした。

この尊者の孝心は、伝え聞く人々を深く感動させ、毎年七月十五日には、親先祖のため供養する人がふえてきました。

そして、三千年後の今日まで、お盆の行事として伝わってきました。

「お盆」といえば、数ある仏教行事の中でも、特に、何ともいえないつかしい気がいたします。これは恐らく日本人誰でも気持ちでしょう。

それもその筈です。お盆は、先祖代々営んできた行事でもあるし、この時こそが先祖や亡き親兄弟、その他故人の、みたまをお迎えして、眼のあたりお慰め（供養）することができると思うからです。

私共は、まずお盆に先き立って、お仏さんのお飾りを

し、心づくしのお供物を供えて、みたまをお迎えする用意をいたします。

そして、「お迎え」のお墓まいりをして、いよいよお盆ともなれば、「迎え火」をたいて、みたまをお迎えします。

「今日からは、故人が、家のお仏さんにお宿りになって、私共と一緒に暮らしになるのだ」

と思えば、本当に「たま棚の奥なつかしや親の顔」という気がいたします。

私共は、出来るだけおいしいもの、故人の好きだったものを供え、出来るだけ喜んで頂きたいと思えます。

そして、自づと合掌して、み仏にめい福を祈らずにはいられなくなります。

そして、「これでこそ故人も、私共の気持ちをお汲み取り下さるだろう」といい知れぬ清らかな満足を感じ、ほっと安心した気持ちになります。

同時にまた「ご先祖や故人は、みんな二度と帰らぬあの世へ行ってしまったのだ」と、しみじみ感じます。そしてまた「それなのに自分は、いま現に、こうして生きているのだ」と思う時、いい知れぬ有難さが身にしみてきます。

しかし、一体私共が生きているということ、それは実は、あみださまに生かされているのです。そしてそれは、自分ばかりでなく、あの世の人たちも、あみださまのお膝元で生かして頂いているのだと思えば、何か一つの大きな命の流れの中にいる自分が、不思議でもあり、ありがたくもあって、改めて心からあみださまに合掌して感謝せずにはいられない気持ちにもなります。こうした信仰的気持になってこそ年に一度のお盆をいとなむねうちがあるでしょう。

また、そういう気持が、日常生活の中にまで織りこまれて行く時は、からだの上にも、暮らしの上にも、どんなにかよい結果が来ることでしょう。これこそ、お盆の大きなどくどくというものです。

孝行心と供養——この二つは、いづれも相手の苦しみを救い、よろこびを与えるものとなるもので、まさしくお盆の精神です。

以上のように、お盆には、先祖や亡き人の追善供養を一心に励むことが肝腎ですが、追善のためには、お念仏の功德は広大ですからお盆の行事には、つとめてお念仏をたむけるようにいたしましょう。

「お念仏は、この世あの世（現当二世）ともに役にた

つもの」とお経にありますから、この世の私どもに役にたたぬはずはありません。また「み仏のお慈悲は、お念仏を申すものを、必らず救いとしてすてない」とも、お経に説かれていますから、み仏は、お念仏を申すものをいつでもお守り下されるのです。

私どもは、得意のときもあれば失意のときもあり、達者なときもあれば病気のときもあり、また人間には、利口もあればおろかなものもありますが、その失意に泣き、病気に悩み、おろかさをなげく時にも、み仏は、お見すてなくおまもり下されるのです。

「たよになるものとは、何ひとつないときでも、み仏だけはおまもり下さる」と思えば、どんなに心強く、安心であり、この世を明るく生きてゆく勇氣も出てくるというのです。

「念仏を申すは、生れつきのままにて申すなり。智者は智者にて申し、愚者は愚者にて申し、慈悲者は慈悲ありて申し、邪見者は邪見者ながら申す。一切の人みなかくの如し」。

お念仏には、なんの条件もなく、ただひたすらに申すだけでよいことを、法然上人はこのように仰せられています。

今年は、まさに、法然上人の浄土宗開宗八百年に当たります。



お

盆

このような年に迎えるお盆には、一そうお念仏をはげみ、意義ある一生を送りたいと思います。

新保義道

(ハワイ・カフルイ浄土院住職)

一、お盆の行事

七、八月(関東は主として七月、関西は八月が多い)ともなれば、全国津々浦々の家では、祖先のみ魂を迎えて供養がいとなまれ、寺々ではお盆の法要、お施餓鬼がつとめられる。又日頃故郷をはなれて働いている人々も、祖先のお墓まいり、老いたる父母を慰めるために帰ってくる。

だんだんすたれてはきているものの、所によっては、お墓、四辻、川端、門口などに、薬火等を焚いて亡き人

々の「迎え火」とし、十三、十四、十五の三日間はお仏壇を美しく掃除し、精霊棚(新仏の出た家だけの地方もある)を作り、新仏、祖先代々のお位牌に野菜、果物、菓子、料理をととのえてお靈膳を供え、盆灯籠をつらし、花を供えて霊前を飾る。地方によっては先祖さまがウマに乗ってくるという気持から、ナスとかキュリで馬の形を作って供えたり、この頃出はじめる赤トンボを精霊トンボとか盆トンボといい、先祖さまがこのトンボに乗ってくるのだともいう。そしてこの三日のうちに寺の坊さんを招いてお経(棚経とよぶ)をとこなえて貰う。

更に、盆灯籠、お花、お供え等を持ってお墓まいりを

し、又お寺でつとめられる盆のおつとめにおまいりする。

十六日（或は十五日）夜には送り火を焚いて祖先の霊を山へ送り（京都の大文字が代表的なもの）又川や海へ霊を送り出す精霊流し、灯籠流しとなって盆の行事が終るのが一般の風習である。

このように、お盆は亡き父母や、先祖の魂を迎えての慰霊の行事ではあるが、幸いにして父母が健在であれば、その父母に感謝し喜んでもらうようにするのも又大切なことといわれている。「父母の家に来り、寺院に詣で先祖を拝す」ための一月十六日の「やぶ入り」の風習が、いつの頃からか盆の十六日もまた「やぶ入り」として奉公人が休暇をもらって親もとへ帰るようになってきた。このことを生盆（いきぼん）といっている。従ってお盆には仕事に出ている者だけでなく、他家に嫁いだ娘も孫をつれて父母の家に帰り、子や孫が揃って父母を慰めると共に、お墓やお寺におまいりするまことに心ゆかしい風景が展開されるのである。

現在では寺をはなれ、リクリエーション行事化された嫌いはあるが―後述のハワイでは寺と切りはなすことのできない大切な行事であるが―古くから盆おどりも盛ん

に行われてきていた。

二、ハワイのお盆

仏法東漸という言葉の通り、印度に起った仏教は、今ではハワイ、南北アメリカにも弘まっている。ここハワイでは六月の声をきくと、各家庭では、「盆廻りで開教使さんが来て下さるから」と心づもりをし、各宗の開教使も棚経（といわずに盆廻りと呼んでいるが）に廻りはじめる。それは日本の棚経のようにお盆の三日間の内に廻るのでなく、六月に入ると廻りはじめ、自分の寺の盆法要までにすまずという習慣になっている。どうしてこうなったか本当のことは知らないが……恐らくは二つの理由からでないかと思う。その一つは、交通機関の発達していなかった初期移民時代には広い地域―私の所を例にとっても、一周すれば百マイル（約一六〇km）以上もある地域―而も三百、五百、千軒という家を短い日数では到底廻ることはできない。その二は、そう度々訪れることのできない遠方の信徒の家へは、この盆廻りが信徒宅を訪れるチャンスであり、従ってゆっくり語り合うことのできる日でもあるからである。従って、一カ月から

二カ月かかって、ゆっくり廻ることになってきている。
「棚経は百つつむうちもうしまい」という古川柳にある風景は少い。又当地でも、だんだんすたれつつはあるが、「お盆だけは、一人でもたくさんのお教使さんにおまいりしてほしい」と、五人、六人の各宗のお教使がおまいりする家も少くない。この点は衆僧の供養をすすめられたものとの姿に近いともいえよう。

そして、七月、八月の二カ月は毎週末どこかの寺で、盆法要と盆おどりが盛大に展開される。これも日本にはないことであろう。以前は、日系人の大部分が夜業のある砂糖やパイナップル耕地の労働者であった為、夜業のない土曜、日曜の夜行われたが、近年は、それらの耕地労働者が少くなつて来たことと、月曜日の仕事に差し支えるということから、金、土の両晩に変わってきている。十三日から十五日の間に同時に行わずに各週末を利用するということではできるだけ近くの寺同志迷惑をかけないという配慮と、週日制であるということからこうなったものと思われる。

更に当地の盆の行事は、夜七時から法要と説教、これに引続いて殆んどの寺では八時から境内で盆おどりが盛大に行われ、やぐらを中心に平生日本の着物など着るこ

とのない一世から四世、五世の子供に至るまで、中には白人までが、着なれない日本着をきて夜の更けるまで仏教盆おどり、民謡おどりをレコードと太鼓にあわせて踊っている。これは、既に日本の寺では見られない風景かもしれない。海岸近くにある寺では灯笼流しを行うところもあるが、多分に観光化された嫌いがなきにしもあらずである。

三、むすび

お盆は、自分の先祖に、そして自分と直接関係のない無縁の灵魂の冥福を祈ると共に、生きている父母を訪ねて喜んで貰い、そして、自分が今生きていることの有難さを味う「祖先の日」「父母の日」である。

同時に、目連の母の中に自己の本性を発見し、自分こそがお盆に供養されるべき立場の者ではないかと静かに自己をみつめる「反省の日」「さんげの日」がお盆でなくてはならない。

そして、その欲心、物惜しみの心を少しでも小さくしてゆく為には、精神的にも物質的にも他に少しでも奉仕させて貰う。「奉仕の日」「布施の日」でもあるべきで

ある。

広いこの世の中には、着るものに不自由している人、食べるにかく人もあろう。みよりとてなく養老施設で淋しく暮す人、病床に横たわっている人もあろう。幸

信仰例話

昨年のお盆のことでした。私は、或る檀家のお棚経に伺ったのですが、あいにく家の人たちはみんな留守で、女中さん一人と、犬一匹が留守番をしていました。

ところで、そのスピッツは、いつもは吠えついて仕方がなかったのに、その日はどういふものか、なつかしうに尾を振って、私を案内するかのよう、二階の仏間に行き、お経中はちゃんとそばに座っており、帰りにはまた先きに立って玄関に下り、さらに門のところまで見送るという念の入れかたでした。

私は、不思議なこともあるものだと思い、その後ご主人にそのことをお話ししますと、「私が平素不信心であったので、妻の霊が私をいましめてくれたのでしょう」と言って、いかにも申し訳なかったという表情でした。

聞けば、亡くなった奥さんは、この犬を大変可愛がられ、十年もの長い間、いつも自分がお仏壇の前でお念仏

い自分はその仲間入りをしていない幸福者だと気づき、自分の力で出来るだけの情心―施設や病院の慰問、慈善事業への寄付等―を運ぶことが仏教徒としてのお盆に於ける行事につけ加えられるべきものと願うものである。

をとええられる時にはかならずそばに愛犬を座らせていたようです。

この奥さんは、お念仏の信者であるからには、アミダさまを信じ、み仏をうやまう心持でいられたことは申すまでもありません。

そういう心持が中心にあって、犬を可愛がられたので、犬も奥さんの心に深く感じて、このような不思議をあらわしたのであらうと思います。

アミダさまは、人間ばかりでなく、生きとし生けるものを、ことごとくお救い下さるのですから、奥さんを通じて、犬をもお導き下されたことと、ありがたく感銘いたしました次第です。信仰に関するこのような話はいくつもあります。科学の及ばない世界で、宗教が果たす役割は、どんなに大きいかを、しみじみ思わずにはいられません。

(S・K)

特集 極楽と地獄



極楽について

香川孝雄

(仏教大学教授)

極楽とか天国という世界は、宗教的理想境として、数千年の昔から、世界のあらゆる地で人類が憧れ求めてきた境地であった。その裏には人類が多年にわたって理想世界を願っても、求めても得られない苦の世界があり、意の如くならない世の中があり、矛盾だらけの社会があった。この様相は今も変らぬいつわりのない現実の姿である。そこに自分自身の力だけではどうしようもなく、神や仏の力を信じ、それに頼ろうとする宗教心が芽生えてくるものと思われる。

仏教でも極楽とか、浄土とか、あるいはこれを合せて極楽浄土という名で理想の世界が説かれているが、『無量寿経』によると「その国土は、阿弥陀仏が未だ法蔵菩薩という一修行者であったときに、すべての人々を平等に救いたい。そしてかれらが往生するわが仏国土は理想の世界たらしめたい」という四十八の本願を立てられ、長い修行の結果、これらの本願を成就せられて、自らは阿弥陀仏となられ、理想の極楽世界が建立せられたのであると説かれている。したがって、

そこに生まれた人々は、すべて救われた人々であり、苦を脱却した人々たちで、楽のみがある世界として説かれているのである。梵語で極楽のことを「スカーヴァティー」を云うが、これには「楽を有する（国土）」、あるいは「幸福を有する（国土）」という意味があるが、まことにこの世界は、苦とか悩みとか、迷いのない平和な世界で、漢訳經典には、ときに「安樂」とか「安養」とも訳されている。

盗みや殺人が横行し、賄賂が公然と行なわれ、嘘や偽りで他人をだまし、虚栄や見栄を張って高ぶるなど、慚と惡の渦巻くこの世はまことに地獄と云ってよいであろう。たまには喜びや楽しみがあっても、それらは一時的のもので、昨日の喜びは今日は悲しみと変わり、昨日の楽しみは今の苦しみとなるのが、この世のならいである。

去る四月二十一日に筆者の遠縁の娘が親戚や知人の祝福を受けて結婚式を挙げた。父は早く亡くなり、母一人が手塩にかけて育てた長女の結婚とあって、母は出来得る限りの奮発をして結婚の荷物を整えた。周囲の人々はこの良縁を喜び、本人もこれ以上のしあわせはないと云って、喜んで新婚旅行に出発した。しかし翌々日のニュースはどうであろう。バリ島で飛行機が墜落、乗員全員死亡の模様、そして乗客名簿にはその娘の名があるではないか。その母は茫然自失、次女と

親戚のものがバリ島に飛んだ。しかし遺体はバラバラで誰が誰だかさっぱりわからず、ただハンドバッグのみが見付かった。その中には結婚記念に贈られた赤い珊瑚の数珠が無傷で入っていた。これが現実の姿であり、この世の喜びや楽しみはあくまで相対的のものである。けれども極楽の幸福は絶対的のもので、それが永遠に続くのであれば、誰もが求めて止まない理想の世界である。この幸福の境地を求めて綴られた宗教文学が『無量寿経』や『阿弥陀経』である。いまそこに描かれた極楽のすがたを通して、今日のわれわれの生き方を反省し、現実の生き方は、どのようにあるべきかということを見出す糧としたい。

『無量寿経』でも『阿弥陀経』でも極楽は西にあると説かれている。大きく真赤になった夕日の落日は、まことに美しく、それ以上に神々しく、そのかなたに極楽浄土があることを思わしめるものがある。しかし、それと同時にインドでは東は過去をあらわし、西は未来を意味する。したがって、未来に理想とする世界があるということは、われわれが日々の努力、精進によって、来るべき将来の理想に一步一步近づいていくという向上心を奮い起させるものである。これが逆に未来に地獄の世界があるということになればどうであろうか。たとい現在の生活が幸福であっても、現在は真暗闇となってしまう

うであろう。未来に極楽があると信ずることによって、現在の人生が明かるく、希望のある、生きがいのある生活が出来ることとなる。

さて極楽の情景について無量寿經の梵本には次のように說かれてゐる。

かの無量光如来の極楽と名づける世界は富裕であり、隆盛であり、安穩であり、豐饒であり、風光明媚であり、多くの天・人で充ちてゐる。

この風光明媚ということについては、さらにお伽の国へでも行つたような描写がなされている。すなわち木は美しい花を咲かせ、果実は枝もたわまんばかりになり、川や池には澄んだ水がたたえられ、その底は金の砂が布かれてある。鳥は美しい声で鳴きさえずり、微風がそよそよと吹いてゐる。これは自然のそれぞれが、皆自分の持ち味を十分に生かし切つた躍動する姿である。一つとして不十分なもの、アブノーマルな働きをしているものはない。自然のそれぞれが十分に自分の持味を生かし切つたときに、このように美しい情景となるのである。それに対して現代日本の都会の風景はどうであらうか、並木の葉は埃とスモッグで白く汚れ、花も十分に咲かずことはできない。川の水は汚水となり、その底にはヘドロが一杯たまつてゐる。じつに不健康な姿であり、そんなと

ころへは鳥も蝶もとんではこない。全く極楽とはほど遠い世界である。各自の持味を自然のままに、ありのままに出し切つたところに極楽の世界がある。このことを『阿彌陀經』では「極楽の池に咲く蓮華は、青色には青の光、黄色には螢の光、赤色には赤の光、白色には白の光あつて、微妙、香潔なり」と說かれてゐることによって尽くされてゐる。蓮華は赤ばかりでも面白くない、また白ばかりでも面白くない。青や黄や赤や白などの種々の色があつてそれぞれに自分の持ち前の美しさを發揮するところに美しさがある。人間の社会も全くその通りであつて、背広に身をやつしたサラリーマンばかりでは社会は成り立たない。やはり泥と汁でまみれて筋肉労働に従事する人があり、それぞれの職場で、その本分を十分に發揮することによって社会は成り立つていくのである。家庭においてもそうである。主人は主人としての勤めがあり、主婦には主婦としての使命があり、子供には子供の本分がある。各自の持ち場を十分に守り、それを果たすことによって円満で幸福な家庭が築かれるのであるが、誰かが自分の責務を十分に果たさずに人に助けを求めるようなことがあるとその家庭は円滑を欠くこととなる。このように各人が各人の持ち前を十分に生かし切つて活動するところに、經典に說かれていた富裕があり、隆盛があり、安穩があり、豐饒な世界が現

われる。これが極楽の世界だと説かれているのである。『無量寿經』には、また次のようにも説かれている。

また極楽世界には地獄もなく、餓鬼もなく、畜生もない。……そこには不善という言葉すらもない。

そのように各自の持ち味を十分に生かし切った極楽の世界には地獄の苦しみを受ける人もいなければ、餓鬼や畜生のようないない貪慾な生き方をする人もいない。まして不善というようなことをする人もいなければ、不善という言葉すらもないと云うのである。

往生要集の地獄と極楽

三田 全信

(京都市北区光念寺住職)



階前の梧葉……すでに秋声を告ぐ。盛夏に桐の葉はボトリと落ちる。そしてもう秋が近づいたことを知るといのであるが、われわれは鈍愚で何も感じない。恵心僧都は比叡山に

人には人それぞれの徳性を具えているものである。たとえそれが微力であっても、その人、その人の徳性を十分に生かし、發揮することによって人間らしい生活ができ、極楽の世界を築きあげることができであろう。法然上人は、このことを法爾の道理と名付けられ、焰は空に上り、水は低い方へ流れていく。これは自然の道理であって、人間もありのまま、人それぞれの光を放ち、一心に念仏することによって、仏の来迎にあずかることも法爾の道理であると教えられているのである。

学んだ大学僧であり、いな中国にも響く仏教学者であった。若い頃学問を励んで陛下に召されて御前講義をつとめ、多くの頂きものを拝領して感激し故里にわびしく住む母を慰めよ

うとして拝領物を持って帰って母に物語ったのであるが、喜ぶであらうと思った母は顔をそむけて、「お前を比叡山に登らせたのは、立派な学者にならせようためではない。世のため人のためになる立派なお坊さんになって欲かった」と、この母の一言身にしみて名聞利養の学をすっかりすて去って、ひたすら母の慈訓を守り『往生要集』の著作に心を傾けられたという。

『往生要集』とは……三世因果の理法を述べられたものである。三世とは過去・現在・未来で因果とは原因あれば必ず結果がある。それが三世にわたってつながるものである。因果律は哲学にも実存することを否定しない。恵心僧都はそれを過去・現在・未来にまでも実存すると説かれた。過去といっても昨日や一昨日だけではないわれわれの知り得ない過去世であり、未来といっても、はかり知れない永遠の未来世である。その中に人間のなす行為にすべて必ず因果の理法によって善因果悪因果がさばかれるというのである。人には知れまいと考えた死体コンクリート詰事件、一女性が十億円に近い金を横領した銀行職員事件も既に明るみに出た。オーパイ三億円事件もいづれか発覚する時が来る。「天知る地知る人が知るのみならず」行った自身が知っているのである

から三世因果の理法はまぬがれない。悲しいかな人間は僅かの時間で恵心僧都の三世因果の理法を解決しようとする。これが現代人で地獄極楽説も一笑に附するものである。

地獄説……恵心僧都は諸経を探究って地獄に八種を数えられた。その八地獄とは、(一)等活地獄(二)黑繩地獄(三)衆合地獄(四)叫喚地獄(五)大叫喚地獄(六)焦熱地獄(七)大焦熱地獄(八)阿鼻地獄である。

(一)等活地獄とは現代的に十三万から十六万キロの地下にあるという。獄卒が鉄棒で罪人を打ち五体を破砕し、また利刀をもって肉を裂く。罪人が死ぬと涼風が吹き、活き直ってまた迫害にあう。これは殺生罪を犯した者が随るところという。

この地獄の四つの門に附随した苦処があつて第一は尿泥処といって極熱の尿がへどろのようになつていて味はにがい。かたい嚙をした虫がその中に充滿している。罪人がそこへ入るとその虫が競つてくいついて、皮膚を研つて肉をくい、骨をかみくだいて髓を吸う。第二は刀輪処がある。ここは鋭い刀の林があつて雨のように降つて罪人を苦しめる。第三は釜熱処で罪人を攪まて鉄のカメに以れ豆のように煎る。第四は多苦処といって数えきれないほど苦があるところである。第五は闇冥処といってまっ暗な処でいつも闇火でやかれる。第六は不喜処といって、猛しい火災が昼となく夜となく燃えて猛鳥、大狐のなく声が堪えられなく不気味なところである。第七は

極苦処といって罪人は峻しい崖の下にいて、いつも鉄の火で焼かれるところという。

(二)黒繩地獄とは熱鉄の繩にしばられ、熱鉄の斧で切り割られるところである。

これは殺生や盗みをした者が墮ちるところという。

(三)衆合地獄とは殺生・偷盜・邪淫を犯したものが墮ちる地獄である。鉄山が両方から迫って罪人を砕き鉄炎の嘴のある鷲が来て罪人の腹を引き裂いて食う。刀葉林に入ると樹の上に美人が着飾っているのが見える。それですぐに樹に登って行くと葉は刀となって身を切り苛む。登り切って美女にふれようとするとたちまち地上に媚をふくみ欲情の眼で罪人を招く。このようなことを繰り返し罪人はへとへとに疲れ切ってしまう。男女の恋愛邪欲の相を面白い比喻によって表現されている。

(四)叫喚地獄は衆生がこの地獄に入れられると熱湯たぎる大釜に投げ込まれ或は猛火の鉄室に投ぜられ、苦に堪へず泣き叫ぶからこの名があるという。これは殺盗・邪淫・飲酒の罪を犯した者が墮ちるという。過ぎた大戦にナチドイツがユダヤ人を一室に閉ちこめて毒ガスを通じて大量殺害を行ったことが想い出されるであらう。

(五)大叫喚地獄は前の叫喚地獄と同じであるけれども非常に時間的に長い。殺・盗・邪淫・飲酒・妄語を行ったものが墮ちる地獄とされる。悪役でも終身刑や長期刑は罪人を非常に苦しめるものである。(六)焦熱地獄はフライパンで肉を焼くように熱鉄板上で或は串指に

して腹や背を猛火で焼き或はハンバークのようにすりつぶして団子にして焼くという。それで炎熱地獄ともいわれ殺・盗・淫・飲酒・妄語の罪をつくった者が墮ちるところといわれる。罪は別としてビルの火災は忽ちに焦熱地獄化することを忘れてはならない。

(七)大焦熱地獄は前より一層酷しいものである。地獄の火は地上の火とは異って水をもってしても消えない。業火といって前世の悪い報によるものである。

(八)阿鼻地獄(無間地獄)は救済の道がない地獄で、七重の鉄城に囲まれ亡の鉄輪から火泉がほどばしり、沸え返った銅が湧いてその城を焼き罪人も焚きつくすという。

このような地獄は五戒を破って自らその所業によって軽重のある苦の地獄に墮ちるので極楽を求めようとする。

極楽……とは(一)浄土の菩薩が迎えて下さる楽しみ、(二)蓮華がはじめて開くときの楽しみ、(三)身に勝れた相と不思議(神通)が得られる楽しみ、(四)五官の美しい世界の楽しみ、(五)喜びの尽きない楽しみ、(六)縁あるものを救う楽しみ、(七)浄土の菩薩にあえる楽しみ、(八)仏にまみえて教を真直に聞く楽しみ、(九)心のままに仏を供養する楽しみ、(十)仏の道を推し進める楽しみの十楽があげられている。これは『来迎讃』にうまく表現されているので挙げよう。

來迎讀……(一)攝取不捨の光明は、念ずるところを照すなり 観音

勢至の來迎は、声を尋ねて迎ふなり 娑婆界をば厭ふべし いとほ
ば苦海を渡りなん 安養界をば願ふべし 願わば淨土に生るべし、
草の庵靜かにて 八功德池に心すみ 夕べの嵐音なくて、七重宝
樹に渡るなり 臨命終の時いたり、正念たがはで西に向き、頭を傾
け手を合せ、いよいよ淨土を欣求せん、開けば西方界の空、伎楽歌
詠はのかなり、見れば緑の山の端に、光雲はるかにかがやけり、こ
の時身心安くして、念仏三昧現前し 毫光わが身を照して、無始の
罪障消滅す。光雲ようやく近づきて、胆仰すれば弥陀尊、相好円満
し給ひて、金山王のごとくなり、鳥瑟高くあらはれて、晴の天に緑
なり、白毫右にめぐりて、眉の間にかがやけり、管絃歌舞の菩薩
は、雲に袖をばひるがへし 持幡供花の莊嚴は、風に任せて乱れた
り、観音勢至諸薩埵、光の中にみちみてり をのをの威徳あらはれ
て、声声行者をはめたまふ、眼にみてる慈悲の色 おつる涙もとど
まらず、耳に聞ゆる法の声、歡喜の心いくばくぞ、すなはち紫雲た
なびきて、柴の戸ぼそに立めぐり、恒沙の衆会もともに、前後左
右におりたまふ、庵の上には諸化仏、星をつらねて影向し、苔の庭
には諸聖衆、光を並べて長跪せり、伎楽の菩薩も此時に、踊躍歡喜
安からず、絲竹の調べ雲を分け、徘徊よそほひ地を照す、ときに大
悲の觀世音、やうやく歩みちかづきて、紫磨金の身をまげて、蓮台
かたふけよせたまふ、次には勢至大薩埵、聖衆同時に讃嘆し、大定

智悲の手をのべて、行者の頭をなでたまふ、つひに引接したまひ
て、金蓮台にのせたまふ、輪廻生死のふるき里、此時ながく隔たり
ぬ、すなはち金蓮台に乗り、仏の後に隨がひて、須臾の間を経るほ
どに、安養淨土に往生す、昔は大悲の利益を、僅かに伝へて聞しか
ど、今は阿弥陀の引接を心のままに蒙り、然るに弥陀の淨土
は、快樂不退の処にて、壽命も無量に長ければ、樂みつくる事ぞな
き、三十二相そなはりて、花嚴端正殊妙なり、六通三明さとりえ
て意のごとく自在なり、上は有頂の雲のうへ、下は無間の底まで
も 苦海の群類ごとく、利益あまねく施せり ねがはく弥陀く
わんをん 行者の誓ひを憫念し 大悲誓願あやまたず 來迎引接た
れたまへ 願くはこの功徳を 普く衆生に施こして、同じころを
発つ 安樂國に往生せん 願我臨欲命終時 尽除一切諸障礙 面
見彼仏阿弥陀 即得往生安樂國

文学的表現……を経た『往生要集』は地獄極樂の相が眼に
浮ぶであらう。これは読む文章ではない。恵心僧都の文学を
通して信眼をもつて觀直されねばならない。紫外線や赤外線
のような肉眼には見えない線があるように、信眼に映ずる恵
心僧都の極樂地獄は時間的には永遠の時の流水の中のことで
あり、空間的に無限大の広さの中に生起した人間行為の構想
である。

絵図 『地極と極楽』

東京品川

願行寺所蔵

地獄・極楽を描いた絵は古来数多い。この軸はとくに有名な画師の作でもなく、時代も古くない。明治末期のものである。けれども、昔しの僧侶が絵解に用いたこの手の絵画が、明治の時代になっても布教用に作られていることを示しており、明治の仏教者の布教に対する熱意をしのぶことができる。明治期を迎えた仏教は、キリスト教に刺激されてか、平易な布教書を出版したり、布教師がアルコールランプの幻灯機をさげて各地を回るといった、新しい努力が試みられたが、依然として伝統的な絵解の布教法は続いていた。

物語は、善之丞という子供が三宝誹謗の報いでわずらう父を心配し、神仏に病氣平癒の願かけ参りをする。ある夜、観音堂にこもって念仏していると地蔵菩薩が現われて、善之丞を地獄と極楽に案内して、地獄の恐しい様相と、それと対象的な極楽の甘美な様相を見

せてくれる。地獄と極楽を一めぐりして家に帰った善之丞は、自分が感見したそのできごとを家族に話す。はじめは信じなかった父



①善四郎三宝誹謗の罪で病をわずらう



②善之丞、父の病氣平癒の祈願に詣でる途中鬼におそわれる。

も、ようやく信仰心を持つようになり、やがて無能和尚の勧化で出家し、最後には極楽往生を遂げる、といった筋である。
四十八段の絵が三幅の軸に収めてある。
「明治三十八年一月十八日、仏画士松下尚悦開眼師久住静観」の銘記がある。今回はこのうち明瞭な絵について紹介することにした。



③



④



⑤

③④⑤地蔵菩薩に導びかれて善之丞地獄をめぐり、その恐ろしさを実感する。

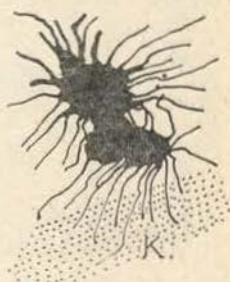
⑥⑦地獄を去って極楽に向い、そのありがたい様をまのあたりに知る。

⑧地獄・極楽をめくり終えて再び観音堂にもどる。



⑨⑩父善四郎、無能和尚の勸化を受けて仏門に帰依し臨終には念仏して大往生を遂ぐ

アンケート



① 経典に説かれた極楽と地獄について

② この極楽と地獄の思想と現代の世相との触れ合いについて

内 山 憲 尚

(聖美幼稚園長・七十四歳)
(東京・品川区在住)

① 極楽は地上西のはて、十萬億土に存在すると考えられ、地獄は地下、ある世に存在すると考えられていた。

② 最近天国と地獄と言われ、極楽ということばがだんだん使用されなくなった。極楽は仏様に守られた、蓮の花のさいている浄らかなところであるが、天国は神様(ゴッド)のいる天の楽園であって、極楽とは全く別の存在である。

稲 葉 好 人

(貴金属商・五十四歳)
(東京・世田谷区在住)

今年もお盆の日が参りました。私は子供の頃からいつもの月になりますと、必ず地獄と極楽の絵をどこかで見ておりました。地獄と極楽という所が、本当にあるのか、或は単に戒めのための架空のものであるのかにつきましては、経典に『これが地獄でこれが極楽だ』と説かれているところから見て、私は地獄も極楽も現世にあると理解しております。

極樂が現世にあると申しますれば、それは何処だと、折返し質問されることは必定ですが、極樂については、阿弥陀經の初めに『その時、仏、長老舍利弗に告げたもう、「これより西方、十万億の仏土を過ぎて世界あり、名づけて極樂という。その土に仏ありて、阿弥陀と号す。いま現に在まして說法したもう。舍利弗よ、かの土を何が故に名づけて極樂となすや。その国の衆生、もろもろの苦しみあることなく、ただもろもろの樂しきを受く。故に極樂と名づく。』』と説いております。

それでは私達はどうしたら極樂へ往けるのか。人の苦しむようなことを全部自分が引受けて、樂なことばかりを人に与えるようにすれば極樂へ往けるのか。經典には阿弥陀仏が現在極樂で說法しており、その阿弥陀仏の壽命と光明は無量である故に、今でも私達を極樂へ導いて下さると説かれており、未來にもまた同じであります。

法然上人は、私達が必ず極樂（仏の国）へ行けるのだと堅く信じて、毎日、朝に夕に念仏を申しておれば、それだけでよいので、この他には別に何の意味も含まれてはいないと教えておられます。これで仏の国、極樂へ往けるのですから、この念仏を称える教えは決して難かしいものではなく、一生を通して精進できるものであります。

また、地獄はどのようなところかというと、阿弥陀經に説かれた教えを受持し、読誦實踐しない人が行くところです。もちろん積尊の教えを非難するような人があれば、決して地獄の苦惱から逃れることはできません。例えば、人が生まれたままの状態で育ちますと、それは動物と全く同じで、ものに強い執着を持つことになります。

それ故に積尊は、人間が動物性から離れて、真の人間性を得るために仏教をお説きになったのでありますし、法然上人はその一つの方法として念仏を選び出し、『仏名を称える事によって過去、現在、未來の苦みが消滅するということを経えの根本としたもので、これは積尊の仏法に全く随順したものであります。即ち南無阿弥陀仏の文証は、觀無量壽經の終りの方に、弟子の阿難にて「汝よ、好くこの語を持て、この語を持てとは、すなわちこれ、無量壽仏の名を持てとなり」ということに示されております。

私たちは、いわゆる人間の苦惱の原因をなしている執着の心を取りのぞくために、毎日熱心に念仏を称えたいものです。

更に積尊は入滅の時に、精進せよ、放逸であってはならないと教えております。意味は簡単なことで、熱心に仏教を学びなさい、気ままなやり方をしてはいけないということです。

す。法華経では、第一の魔は怠けることであると教えておりますが、私たちも仏の教えを素直に受けとり、一人でも多くの人と共に、極楽への道を、更ににぎやかにしたいものです。

吉田 勇之助

(団体職員・七十四歳)
東京江東区在住

①永遠と真理の世界である極楽は、体験できないものであります。ところが「ただ往生極楽のために南無阿弥陀仏と申して疑いなく往生するぞと思ひとりて申す外には別の仔細候はず」とおっしゃった法然上人のお言葉で、念仏するこの私にも、浄土が静かに開かれてくるのだということがわかりかけてきました。大師釈尊はスッタニパータ(一八二)で、問者に「この世で信仰が人間の最上の富である。徳行に篤いことは安心をもたらす。……智慧によって生きるのが最上の生活である」と申されました。地獄については、その(六七六)で「罪を犯した人が身に受けるこの地獄の生存は実に悲惨である。だから人はこの世において、余生のあるうちになすべ

きをなして、忽ちにしてはならない」。導師のお言葉つつしんでいただいております。

②南太平洋のどこかの島では、環境や住民の日常生活状態が楽土のようだと言ったことがあります。空しい物質的な繁栄を思い違いして、それを追究しているようなわが国には、勿論前記に似たようなところさえありません。現代のわが国の世相は、いとも簡単に、人間が悪玉になる(因縁)きっかけが、あまりにも多いようです。人災や、そしてまた、その最たるもので地獄図画さながらの凄惨な戦争を、この地上からなくすことを、第一に心かけずに、楽土だけの楽園だけをつくろうとしてもできるわけありません。

福間 清子

(神戸市須磨区裕厚病院内)

①極楽とは、流転のない安心した境地で、慈悲心に富み、心はいつも和やかで、何の苦もなく、常春の花咲き鳥うたう、ふくいくとした香気に満ちた光り輝く楽土の世界。地獄

とは、常に流転し、常に悩み、身心共暗黒の泥沼の中で、共にあえぐ世界。

②念仏喜ぶ人は濁世の現代でも、常に守られている故、転重軽受の恩恵に浴して、日々好日の日暮しができ、報恩感謝以外ありません。

瀬 崎 重 吉

(腹物小売商・七十一歳)
川口市在住

①善行によって善い結果があらわれ、悪行によって悪い結果があらわれる。この極めて当然なことは誰でも知っていることであるが、凡夫である私共には、到底命終に至るまで、善行ばかり積むことは不可能なことであります。そこで当

然、皆地獄に落ちて行くより道はありません。それならば、地獄・極楽は一体あるのかないのかとなると、是は信仰上の問題であると存じますが、少なくとも遠い昔より、多くの先哲によって、これを説かれた所を見ると、単なる観念的なものとは思われないのです。私はそういう世界が、必ず存在するような気がします。

②私共念仏子行者は、命終に臨んで一声でもお念仏をととなえさせていただき、お浄土に帰らせていただくために、日常のおつとめにはげんでおりますが、そんな時、み仏の御本願の不思議な御力をいただいて、心に安らぎを覚え、そこに浄土の姿がうつし出されて来るような気持となります。これとは又別にいつも心の奥底より妄念がわき出て来るのを感じます。現実の生活に地獄・極楽のあることでしょう。いつも生死の世界からぬけ出られないのが現実です。

尚、一声のお念仏でもとなえますよう、御寺院、在家の方々が、多くの人々におすすめる御努力を切望いたします。

特集 極 楽 と 地 獄

法然上人靈場めぐり

第六回

村上博了

第八番札所

紀州加太浦

報恩講寺

第八番札所は和歌山市加太浦町大川の報恩講寺である。

上人が十二月八日恩免あり讃岐国生福寺を旅立ち、摂津国押辺を指して船出された。紀淡海上で季節風の大烈風にあい紀州油生浜^{ゆいがはま}に避難されたのである。海岸は岩礁と老松で船のつけ場もない荒磯であったが、辛うじて着船した。たまたま村長阿闍梨孫右衛門が通り合せたのである。村長は怒濤逆巻く荒波の中から弟子に扶けられ、上陸する老僧を見た時、浜

は瑠璃宝地となった。驚いて老僧を仰ぐと、私は法然房源空ですと名のられた、慈眼温容生き阿弥陀如来さまのようであり、ひくい声で念仏されていた。早速お迎し、村民一同とお念仏の功德を拝聴念仏する。季節風は益々荒れた。村民は毎日お念仏の伝道を有難くうけとどめ、草庵を結んで上人を招じ、専修念仏を唱えたのである。念仏講が自然に成立、草庵を報恩講寺と呼び毎日会合し有難や南無阿弥陀仏と唱えた。季節風もないので村民に別れる事となった。別れを惜む村民の乞に委せて、自像を造り余り木で百万遍念珠を造り与えられたのである。

御詠歌は、

極楽も　かくやあらまし　あらまし

はやまいらばや　南無阿弥陀仏

という。村民一同と心から専修念仏され、念仏三昧の有難い極楽境を実現されたのである。現在同地の人々は、不漁時に同寺に感謝詣をされては南無阿弥陀仏と唱えている。畑で



法然上人四国からの帰路上陸された処

<知恩院所蔵>

第九番札所

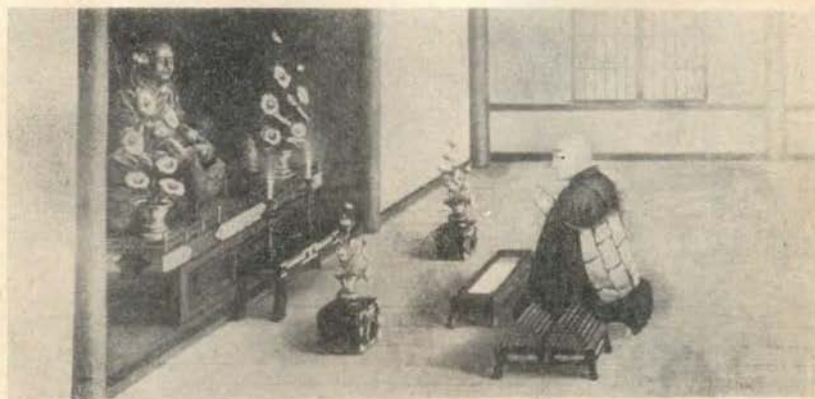
大和国当麻寺

奥院

第九番の札所当麻寺奥院は、二上山麓にある。山門を入つて左に東塔西塔を眺めつつ講堂金堂本堂をすぎ、その後方西奥境内最高所にあり、要害堅固というべきか。当麻寺は中将姫のまんだらで念仏感応の靈場として有名である。

祖山十二世誓阿上人は、京都が常に動乱と火難等の多いことを心配し、建徳元年勅許を得て、この奥院の堂宇を建立し、上人生身の御影と勅修御伝副本等を、安置した靈場であ

歟仕事するも南無阿弥陀仏と、念仏でないと夜も昼も明けない極楽境となった。お念仏の声する所、あらたのしと念仏三昧の有難さ尊さを残されたのである。什宝百万遍念珠、伝法然上人名号、伝自作御影、伝恵心僧都まんだら等。(南海電鉄みさき公園で多奈川支線乗替多奈川駅下車)



知恩院から法然上人の御影を移した処

<知恩院所蔵>

る。御影は武蔵国御家人桑原左衛門入道が、上人に心服帰依し、当時四十八歳の上人像を写し造った。立派な出来ばえ、上人御満足で四十八度開眼されたと伝えられる。源智上人祖山建立時、入道後室が祖山に寄進された霊像であった。御詠歌は、

阿弥陀仏と 申すばかりを 勤めにて

浄土の莊嚴 見るぞうれしき

という。お念仏の功德がよく現われて、お念仏申さずにはいられない。現在は花の王者ぼたんの名所となっている。寺宝四十八巻伝、法然上人筆選撰集等がある。(国鉄高田駅下車・近鉄南大阪線当麻駅下車)

第十番札所

大和国香久山

法
然
寺

第十番札所は奈良県橿原市南浦町法然寺である。同地は早



法然上人高野に参詣の帰路逗留された処

<知恩院所蔵>

く開化した土地でクリークが縦横に走り米作地帯であった。
上人が建久二年（一一九一）五十九歳三月十三日に重源上人の十間に答えられた頃、聖徳太子生誕地橘寺へ参詣の帰途又は大仏殿作事御指図等の往復時、香久山住人達に迎えられては伝道摂化の霊場である。住民の乞に委せ等身大の自像を製作してその草庵に残されたと伝えられる。後奈良天皇の大永八年夏は祖山廿八世上人に保譽源派上人がいた。三河大樹寺開山祖山廿三世勢譽愚底上人門下の高德、大永八年四月七日、後柏原天皇三回聖忌作善の御宸筆阿弥陀経を賜った念仏弘通の高僧であった。その源派上人が、法然上人の夢告を拝し「香久山や麓の寺は、せまけれど、高きみのりを説きて弘めん」と、上人の御歌を賜わりこの草庵に隠栖、法然寺と号したのである。是御詠歌で

香久山の 麓の寺は せまけれど

高きみのりを 説きて弘めん

お寺の大小や都会であつても田舎であつたとしても、その場所等は問題でない。如來の御本願念仏の「高きみ法り」の有難さを、永久に弘める霊場である。

（近鉄宇治山田線耳成駅又は八木駅下車が便）

選釋集講詠

第十五章段

六方諸仏護念篇

六法の諸仏念仏の行者を護念したもう

安居香山

(大正大学教授)



この章は、標題にも示されていますように、念仏を申す人は、常に諸仏に護念せられ、又、多くの菩薩諸天にも護られて、身も心もやすらかになり、現世のもろもろの利益をうけることができることを説かれています。このことは、第七章で、念仏の行者は光明に攝取されることを説かれたところでも明らかにされており、改めてここで、念仏の行者が受けるめぐみについて、説かれています。

各章においてなされているように、最初、善導大師の「観念法門」と「往生礼讃」の一節を引用されます。

観念法門にいわく、また阿弥陀經に説くがごとき、もし男子女人あつて、七日七夜及び一生を尽して、一心に専ら阿弥陀仏を念じて、往生を願すれば、この人常に六方恒河沙等の仏、ともに來つて護念したもうことをうるが故に、護念經と名く。護念經という意は、またもろもろの悪鬼神をして便をえしめず。また横病横死、横に厄難あることなく、一切の災障、自然に消散す。不至心を除く。

ここに説かれていますように、「阿弥陀經」はまた、「護念經」ともいわれます。念仏を申す行者を、東南西

北上下の諸仏がおまもり下さるからであります。「阿弥陀経」のこの部分を「六方段」と申しまして、六方の諸仏が念仏の功德を証明し、念仏の行者を護りたもうことが説かれています。特に「観念法門」では、護念したもうことを更に具体的に説明して、悪鬼悪神から行者をまもるとともに、一切のわざわいや、厄難やくなんからままもって下さることを説いています。念仏の功德くどくのまことに大きいことが分ります。唯最後に、重大な一句が加えられていることを、見落してはなりません。それは、「不至心を除く」とされていることあります。「真心まごころのないものは、その利益をうけられない」ということであります。この世のすべてにおいてもそうありますが、み仏の心に叶うためにも、この真心なくては、何事もならぬのであります。

続いて「往生礼讃」の文が掲げられていますが、「観念法門」と同様な内容のものでありますので、これは略して、これに対する法然上人の「私積ししやく」に入ることといたします。

「私積」で法然上人が問題とされましたことは、諸仏の諸念ということについてであります。

私に問うて曰く、ただ六方の如来のみ行者を護念するや如何。

答えて曰く、六方の如来に限らず、弥陀観音等も、また来って護念したもう。

「観念法門」や「往生礼讃」では、六方の諸仏が、念仏の行者を護念されることは、よく分ったのであります。が、肝心の阿弥陀如来や、観音、勢至等の諸菩薩は、果して護って下さるのであろうか。当然これは、前の文を拝読した時に、起ってくる疑問であります。このことをよく心得なれている上人は、こうした疑問について、明確に、六方諸仏に限らず、阿弥陀如来や、観音勢至までも、お護り下さることを、お説き下されているのであります。

こうした護念の文証として、再びここで、「往生礼讃」や「観念法門」を引かれて、その説明をされています。

それぞれの全文を引用すると、少し煩雑になりますので、「往生礼讃」を引かれるくだりの一部を掲げてみることにします。

また観經にいうがとき、もし阿弥陀仏を称礼念じて彼の国に往生せんと願すれば、彼の仏すなわち無数の化仏、無数の化観音勢至菩薩を遣わして、行者を護念す。また前の二十五の菩薩等と、百重千重に行者を囲遶して、行住坐臥、一切の時処を問わず、もしは昼、もしは夜、常に行者を離れたまわず。今すでにこの勝益の憑むべきあり。願わくはもろもろの行者、おのおのすべからく至心に往くことを求むべし。

ここでは観經に説かれていることが文証としてだされています。「南無阿弥陀仏」と唱えて、極楽往生を願う声を聞けば、阿弥陀如来は、たちどころに多くの化身をあらわし、又観音、勢至などの菩薩の化身をおつかわしになって、行者をお護り下さることは明らかだと、お説きになっています。更に、前に引用された「十往生阿弥

陀仏国経」には、二十五菩薩を、念仏行者護念のために遣わすとされているのであるから、多くの仏によって、百重千重にも取り巻かれ、護られ、昼といわず、夜といわず、何処にしようと、お護り下さることとなる。これほどに有り難いお念仏であるのであるから、まごころから往生を願えと、法然上人はおすすめているのであります。

かつて私は、念仏信仰篤かった父に、或る暗い田舎道でこんなことを教えられたことがあります。

「私はこんな暗い田舎道でも、少しも恐ろしいと思わない。お念仏を申していると、いつも阿弥陀様がお護り下されているからだ。み仏といつも一緒にいるのだ。」

夜道に行く子供の心には、ただ「こわい、こわい」という気持ちだけであった私に、父はこのように教えてくれました。子供ながらに、この父の声にはげまされて、元気づいたことを、未だに忘れません。念仏行者であった父は、誰からかこの教えを受けたのでありましようが、これを強く信じて疑わなかったようで、父の生活

は、いかにも力強いものでありました。

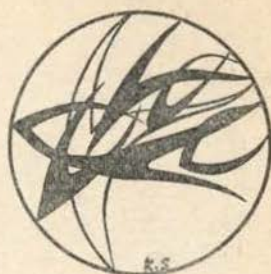
話は少し横道に入りましたが、更に上人は、その文証として、「観念法門」を引用されます。ここでは更に、あらゆる厄難から加護されることを説こうとされていまずので、その部分を引いてみることにします。

また云く、また般舟三昧經の行品の中に説きて云うごとく、仏の言わく、もし人専らこの念弥陀仏三昧を行ずれば、常に一切の諸天及び四大天王、竜神八部、随逐影護し、愛樂相見することゑて、永くもろもろの悪鬼神、災障厄難、横に悩乱を加うることなし。具には護持品の中に説くがごとし。また云く、三昧の道場に入るを除きて、日別に弥陀仏を念すること一万して、命をわるまで相続するものは、すなわち、弥陀の加念を蒙り、罪障を除くことをう。また仏と聖衆と、常に來りて護念したもうことを蒙る。すでに護念を蒙れば、すなわち延年転寿をう。

このところは、念仏の功德が、现实生活の中で、どれ

程に功德があるかということが、般舟三昧經の例によって、証明されています。諸天の諸仏に護念されるということは、単に行者の身をお護り下さるというに止まらず、外的にはいろいろの厄難から、内的には精神的悩みまでも、これを消除して下さることとなります。すなわち、弥陀の護念をうということは、あらゆる罪けがれから逃れることになるのでありますから、何の悩むこともなくなるわけであります。「延年転寿をう」とありますように、長寿を保って、人生を楽しく生きることができるわけであります。

私達は、ここで改めて念仏の功德の何であるかを、はっきりと認識する必要があります。念仏は、まごころから往生を願うものでありますが、そのことは、やがてこの世においても、あらゆる罪けがれからのがれて、長寿を得て人生を楽しく生きることにも繋がるのであります。まことに念仏には、現当二世の利益のあるものであります。ことが、知られるのであります。そしてそれは、念仏を至心に申す結果として得られるものであることを、忘れてはなりません。



仏説無量寿經 卷上(第五回)

村瀬秀雄

一、和顔愛語して法を説く

不生レ欲覺瞋覺害覺一、不レ起二欲想瞋想害想一、不レ著二色声香味触法一、忍力成就不レ計二衆苦一、少欲知足無二染患癡一、三昧常寂智慧無礙。無レ有二虚偽諂曲之心一、和顔愛語先レ意承問。勇猛精進志願無倦、專求二清白之法一以

惠二利群生一。恭二敬三宝一奉二事師長一、以二大莊嚴一具二足衆行一、令二諸衆生功德成就一。

欲覺、瞋覺、害覺を生ぜず、欲想、瞋想、害想を起さず、色声香味触法に著せず、忍力を成就して衆苦を計せず、少欲知足にして染患癡なく、三昧常寂にして智慧無礙なり。虚偽諂曲の心あることなく、和顔愛語して意に先だちて承問す。勇猛精進にして志願うむことなく、専ら清白の法を求めて以て群生を惠利す。三宝を恭敬し師長に奉事し、大莊嚴を以て衆行を具足し、もろもろの衆生をして功德を成就せしむ。

(意訳)

法蔵菩薩は修行を積むに当り財物を貪らず、他人に対して怒ったり憎んだりすることがなく、また他に害を及ぼすことがなかった。それもその筈で法蔵菩薩は貪ったり、怒ったり、害を与えようとする心を一切起さなかったのである。眼耳鼻舌身という五感を通して受けとる感覚的欲望に対して少しも執着することがなかった。よく耐え忍ぶ力を身につけていたので、たとえどんな苦痛にあつても意に介するところがなかった。無欲で常に足ることを知っていたから、貪りや怒りや愚かさから生ずる煩惱を起さなかった。いつも精神統一ができていて平静に思考を集中することができていたから、他から妨げられることのない自由な智慧を得ていたのである。それと同時に他人に対しては、いつも和やかな態度で接し、慈悲にあふれた言葉を用い、しかも人々から求められる前にこちらから法を説きあかすのであった。修行を積んでゆくのに勇猛果敢であり努力精進を続け、おのれが志す願いを果すまでは少しの倦み疲れることを知らなかった。ただ専心に清浄の法を求めてゆき、こうすることによってすべての人々に真の利益を恵み与えていた。また仏法僧の三宝にはつつしみ敬い、師匠先輩には心からつ

かえ、福德と智慧との行によってあらゆる修行にはげみ努めた。このように修行することによって、他方には多くの人々によい行いの報いを受けさせていた。

二、法蔵菩薩の成仏

阿難白レ仏、法蔵菩薩為三已成仏而取二

減度一、為末三成仏一、為二今現在一。

仏告二阿難一、法蔵菩薩今已成仏現在二

西方一、去此十万億刹、其仏世界名曰二

安樂一。阿難又問、其仏成道已來為レ逕二

幾時一。仏言、成仏已來凡歷二十劫一。

阿難は仏にもうさく、「法蔵菩薩はすでに成仏して減度を取りたもうとやせん。いまだ成仏したまわずとやせん。いま現にましますとやせん」仏は阿難に告げたまわく、「法蔵菩薩は今すでに成仏し、現に西方にまします。ここを去ること十万億刹なり。その仏の世界を名づけて安樂という」阿難はまた問いたてまつる、「その仏は成道してよりこのかた、いくばくの時をふとやせん」仏の

のたまわく、「成仏してよりこのかた凡そ十劫をへたり」

(意訳)

阿難は釈尊に問い奉った。「法蔵菩薩はすでに仏になられ、そしてその後に涅槃にお入りになられたのでしょうか。それともまだ仏にならずに今なお修行中なののでしょうか。あるいはまた仏となられ、いま現にどこかに居給うのでしょうか」釈尊は阿難に答えられた。「法蔵菩薩は今すでに仏となられ、現に西方にまします。その国土はここから遠く十萬億の仏国土を隔てた所にあって、その仏のいます世界を名づけて安樂国というのである」阿難は更に問い奉った。「その仏が仏となられてから今に至るまで、いか程の時が経過しているのでしょうか」釈尊は答えられた。「その仏が仏となられてから今に至るまでは凡そ十劫という時が経過している」

三、十二光仏と号し奉る

無量寿仏号二無量光仏、無辺光仏、無礙

光仏、無對光仏、燄王光仏、清淨光仏、

歡喜光仏、智慧光仏、不斷光仏、難思

光仏、無稱光仏、超日月光仏」。其有二

衆生二遇三斯光一者三垢消滅身意柔軟、

歡喜踊躍善心生焉。若在三塗勤苦之處一

見三此光明二皆得三休息一無二復苦惱一、寿

終之後皆蒙二解脫一。

無量寿仏をば無量光仏、無辺光仏、無礙光仏、無對光仏、燄王光仏、清淨光仏、歡喜光仏、智慧光仏、不斷光仏、難思光仏、無稱光仏、超日月光仏と号したてまつる。それ衆生ありて、この光りに遇うものは三垢消滅し身意柔軟なり。歡喜跳躍して善心を生ず。もし三塗勤苦のところにあつて、この光明を見たてまつればみな休息をえてまた苦惱なし、寿終の後にみな解脫を蒙る。

(意訳)

無量寿仏は無量の光明を放つてすべての国土をくまなく照らしている。この光明は諸仏の光明の中で最尊第一の光明であり、念仏を唱える人々をもれなく攝取し給うている。そこで無量寿仏には十二通りの称号があつて仏の異名となっている。この十二光仏の一々の名は次の通りである。第一には無量光仏と呼ばれる。そのわけは無

量寿仏の光明ははかり知れない無量のものであり、十方世界をくまなく照らしているからである。従って念仏を唱える人々はこの光明によって十分に救済される。第二には無辺光仏と呼ばれる。そのわけは無量寿仏の光明は際限なく広い範囲に亘って照らしているからである。従って念仏を唱える人々はいかに遠くにいても必ず救済される。第三には無礙光仏と呼ばれる。そのわけは無量寿仏の光明は何物によっても遮られることがないからである。従って念仏を唱える人々がどんな所にいても、隔礙されることのない光明によって必ず救済される。第四には無對光仏と呼ばれる。そのわけは無量寿仏の光明の勝れて尊いことは他に較べものがないからである。第五には嚴王光仏と呼ばれる。そのわけは無量寿仏の光明は火炎のように輝きわたっているからである。第六には清淨光仏と呼ばれる。そのわけは無量寿仏の光明は念仏を唱える人々を摂取して清淨な人とするからである。従ってその人は姪貪と財貪との不淨の罪が減せられて清淨の人となる。第七には歡喜光仏と呼ばれる。そのわけは無量寿仏の光明は念仏を唱える人々を摂取して歡びの人とするからである。従ってその人は怒りの罪が減せられて歡びの心をもつようになる。第八には智慧光仏と呼ばれる。

る。そのわけは無量寿仏の光明は念仏を唱える人々を摂取して智慧のある者と同じにするからである。従ってその人は愚かさのために罪を犯すことがなくなり、また愚痴の罪が減せられるのである。第九には不斷光仏と呼ばれる。そのわけは無量寿仏の光明は断続することがなく、常に同じように照らしているからである。第十には難思光仏と呼ばれる。そのわけは無量寿仏の光明は仏以外のものには考え得られない絶妙さがあるからである。第十一には無称光仏と呼ばれる。そのわけは仏以外のものには説明できないからである。第十二に超日月光仏と呼ばれる。そのわけは無量寿仏の光明は日や月の光りを超えた勝れたものであるからである。

このように人々が念仏を唱えて仏の光明に浴すれば、その人の貪り怒り愚かさが消滅され、身心ともに柔軟になることができる。この人々の心には悦びが満ち溢れ、自然に善心が起ってくる。もし地獄餓鬼畜生の世界にあって苦しみを受けている人々が、無量寿仏の光明に照らされると、その人の苦しみは止み、再び苦しみを受けることがなくなる。そしてその人が惡道での壽命が終り、次の世界に生れた時には悟りを開くことができるようになる。こうして念仏の功德は惡道におちて苦しむ人々に

まで及ぶのである。

四、賞讃される念仏往生

若有二衆生一聞二其光明威神功德一、日夜
称説至心不断随二意所願一得レ生三其国一、
為二諸菩薩声聞大衆一所三共歎誉称二其功
徳一。至_下其然後得二仏道一時上普為二十
方諸仏菩薩一歎二其光明一亦如レ今也。

仏言我說二無量寿仏光明威神巍巍殊妙一

昼夜一劫尚未レ能レ尽。

もし衆生ありてその光明の威神功德を聞き、日夜に称説して至心不断なれば、意の所願に随つてその国に生ずることを得て、もろもろの菩薩声聞大衆のために共に歎誉して、その功德を称せられん。その然してのちに仏道を得る時に至りて、あまねく十方の諸仏、菩薩のために

その光明を歎ぜられんことは亦今の如くならん。仏ののたまわく、「われ無量寿仏の光明の威神の巍巍、殊妙なることを説くことを昼夜一劫すとも、なおいまだ尽すことあたわじ」

(意訳)

もし人が、無量寿仏の光明に勝れて尊い力と功德とがあるということを聞き知って、昼も夜もこの光明を讃え、真実の心で念仏を絶え間なく唱えるならば、その人は願ひ通りに安楽国に往生することができる。そして安楽国に往生してから、そこにいる多くの菩薩や声聞の人々から讃歎され、その人の功德がほめられるであらう。更にその後においてその人が成仏すれば、その人の光明はあまねく十方の諸仏や菩薩たちから讃歎されるであらう。このことはあだかも無量寿仏の光明がすべての諸仏や菩薩たちから讃歎されるのである。

更に积尊はいわれた。「無量寿仏の光明の威徳と神力とが巍巍として高く聳える山のように尊く勝れていることを、一劫という長い期間にわたって昼夜の別なく説き続けたとしても、とうてい説き尽すことができないであらう」

念佛ひじり三國志

(三)

——法然をめぐる人々——

寺内大吉

挿絵 松濤達文画



京都から木津川の堤添いに、現在の国道24号線を南下してくると、棚倉という町に接触する。奈良まではあと10キロである。

棚倉から左手の丘陵地帯へはいる。高くてせいぜい四、五百米の山々が、奥深くつらなる。

この山峡には奇怪な野鳥がおびただしく棲息していた。姿はコウモリに似て、啼き声は赤児のように可憐で、いたいたしかった。里人は「野っ子」と呼んだ。

「野っ子」は幼くして薄幸な人生を閉じたわらべたちの身替りだと信じられてきた。幼児を失った親たちは、亡骸を山峡へ運んで埋葬した。墓の標しに石塊を立てた。石塊のかげから「野っ子」が羽搏いて飛びたつ。黄昏の空に消えてゆく「野っ子」を、親たちは涙で見送った。

「こんど生まれてくるときは、熱病なぞにかからずに、もっと長生きをするんだぞ」

親たちは合掌し、うろおぼえの経文を口で誦した。

「野っ子」が棲息するこの一帯は、奈良東大寺の別所

＜野っ子＞



前号のあらすじ

平治元年十二月、いよいよ起つた動乱は平清盛が一門共々都から姿を消したることによつて信西にも知らされたが、凶事を感じた信西は逸早く是憲・明遍らと都を逃れた。取りすがる妻紀伊ノ二位は院のお側に托した。そして奈良へ迎う田原の里で決然死期を悟つた信西はみづから土中の人となつた。侍者達を出家させ、是憲にも遊蓮房円照と法名を授ける。事実、都では源義朝を擁して藤原信頼が新しい権力者となつた。その影には右京大夫邦綱がいたのだが、それにしても不幸の最期を遂げたはずの信西はその首を三条河原にさらされることになり、一族も諸国に配流となつた。難を逃れた円照・明遍は一日都に帰つたが、兄は西山に隠れ、弟は一目生母覚御前に会つて行く先を決めるのだという。

で、古くから念仏ひじりたちが山あい谷あいで庵を結んでいた。

ひときわ高い光明山には、こうした念仏ひじりたちのために伽藍が建てられていた。光明山寺と呼ばれた。

その夕暮、明遍は光明山寺をさして登つていった。木幡峠の信西塚を詣でた帰り道で、今宵はその宿房へ泊る予定だった。

ちょうど父信西入道が亡くなって十三回忌にあたつていた。

兄弟たちが醍醐に集り、どれほどきらびやかな十三回忌法要をいとなんだことか。

明遍は和東川の溪流に添った道を踏みながら考える。

先月のことだ。高野山の蓮華谷にいた明遍のもとへ使者がきた。異母兄の澄憲法印からだった。

澄憲は三井寺にいて、その唱導（説法）は富楼那尊者の再来とうたわれ、兩請いの秘法にも長じていた。宮廷の内外で評判の高い人気僧である。

一門八講をいとなもうと言って寄越した。亡父の十三回忌をつとめるかたわら、信西の遺児たち、いずれも桑門の人になっているが、大いにその存在を天下に誇示しようという。いかにも澄憲らしい発想であった。

このゆゆしき仏事は醍醐寺でいとなまれる。開白には澄憲が眼に入れても痛くないほど溺愛する六歳の聖覺につとめさせる。興福寺の覺憲、東大寺別当の勝憲、後白河法皇の寵愛を一身に集めている法眼寺執行の静憲。広隆寺別当の光憲、仁和寺の憲曜らが一堂に会し、結願を明遍につとめてもらいたいと言って寄越した。

平治の乱から十二年余。信西の子らは政界へのカムバツクこそ果たさなかったが、それぞれが南都北嶺で頭角を現わしていた。明遍自身も東大寺で已講の地位を得

て、押しも押されぬ三論学匠となっていたのであった。だが……と、明遍は一門八講に列席予定の兄弟たちの名を再確認した。

ない。兄の信濃守は憲の名前がないではないか。是憲はすでに亡父臨終の折、遊蓮房円照という僧名になっている。

西山の広谷別所で念仏ひじりとなって身をかくしたという消息だけは聞いていた。

一門の兄。それも学徳兼備の長者だった是憲である。当然彼がこの十三回忌法要では導師をつとめるべきだ。父の最後を見届けた人でもある。

その是憲を除外して、何の追悼法要であろうか。

ソツのない澄憲法印のことだ。広谷の別所へも使者を出したに違いない。そして、こんな俗事を拒否されたのであろう。名をつらねていないことこそ、兄是憲のかたい意志と考えねばなるまい。

明遍は、

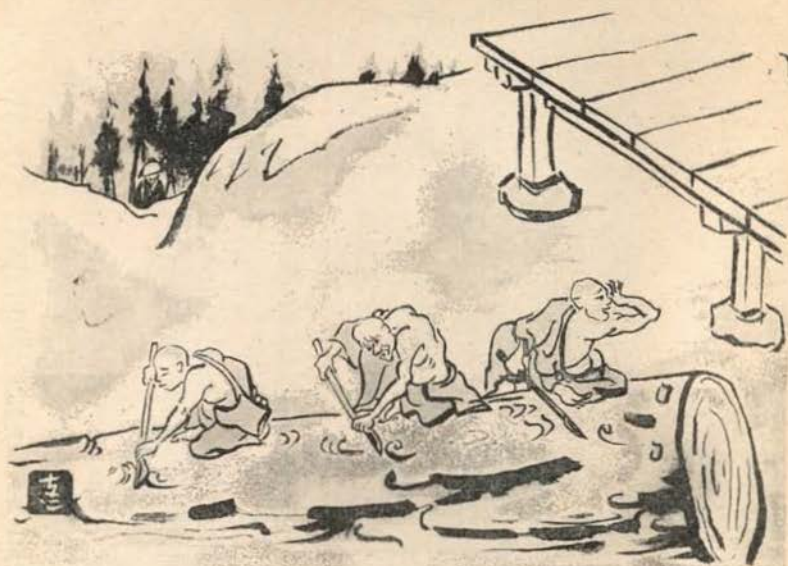
——通世の身にて侍れば、得参らじ

と、不参の意を使者につたえた。

しかし折返し別な使者が蓮華谷へやってきた。

通世の身であれば親への孝養はしないでも良いと言う

＜杉皮をむく僧＞



俗臭がこぼれた。僧は続けて言った。

「造立することが業になる。小賢しい仏法の理屈をこねまわしている間に一寺を一塔を造立した方が遙かに意味があるう」

この僧も遁世のひじりだな、と明遍は思った。ただしこのひじりは、念仏をとなえたり滝浴びなぞをせず、せつせと寺や塔の建立をしているらしい。

「長安の光明寺と言ったが、唐の長安のことか」

「言わずと知れたことよ」

「御坊はその七重の塔をじかにごらんになったのか」

「何べんもな」

「何べんも……御坊は、するとあの俊乗房」

思いあたった。

噂で聞いただけだが、その俊乗房重源はこれまでに三度も海をわたって、入宋しているということだった。何を目的としての渡航か、誰も知らない。

同じ時期、比叡山の榮西も入宋している。榮西は天台章疏六十余巻を持ち帰って、天台座主の明雲に献じたことは有名だ。ところが重源は同じ船で帰朝しながら、しかるべき宗教上の行績を果たしたとは聞かない。

「さよう。明遍どの。そなたはたしか信西入道の遺児

(わすれがたみ)でいらしたな

「うむ」

「ずっと以前に顔を合わせておらねばならぬところだった」

「というと」

「最初に入宋するとき、貴坊も同行する予定じゃったとか」

あの日だ。父信西と最後の別れとなったあの夜、小禪師の明遍は海外渡航で胸をふくらましたものだ。父から宋語の手ほどきまで受けた。あのような大乱が突発しなければ、この俊乗房重源と船でゆられて宋の地へ旅立っていったのであろうか。

俄になつかしさをおぼえた。

その夜、明遍は宿房で重源とおそくまで語り合った。実現し得なかったかの国の話を根掘り葉掘り聞いた。重源も話好きと見えて、こころよく明遍の問いに答えてくれた。

夜が白らむころまで二人は語り合った。今夜の最後の話題だと言わんばかりに、重源はこんな話をはじめた。
「世の中には偉い人間もいるものだ。わしが三度目に入宋する旅立ちのとき、東大寺へ一人の僧が訪ねてきた。

まだ若い人、と言っても三十五、六であったかな。仁安二年のことだ」

「それで」

「こんど入宋したら、是非次の御影像を持ち帰って欲しいと言う。それが、曇鸞、道綽、善導、懷感、少康、五師の御影像だ。これが浄土法門の列祖五師なんだそうなるほど」

「その御影像のあり場所をな、この僧はまるでこれまでに何べんも渡航したみたい、正確に教える。もちろん御影のお姿かたちまでもな」

「それで重源殿は、たずねてみられたか」

「うむ、いちいち拝してきた。場所もお姿かたちに寸分の狂いもなかった」

「その僧は何という名か」

「叡山黒谷の源空上人のもとにいる源空という念仏ひじりだ」

「源空——」

「いつ何処で知ったのか。自分は一度も出かけたことのない宋の寺、それもだ、秘扉の奥にしまっている五祖の御影像を、正確に知っておる。恐ろしいようなものだ」
「源空か」

明遍は呟きをくりかえした。

聞いたことのない僧である。

ということは出身が高くないのである。南都も北嶺も宮廷にならって、高位の僧はすべて貴族の子弟が独占していた。庶民出身では、最低の「入位の僧」にすらなれぬのが現状だった。

ちなみに比叡山におけるこの「入位の僧」が宮中で七位に相当し、一つ上階の六位は法橋上人と称し、さらに権律師ともなれば五位で昇殿が許される身分であった。まして少大僧都は四位三位。僧正法印は廟堂における大臣クラスに匹敵した。

有為有能な碩学徳僧たちが、あたかも門地閥閥にはばまれて、発言権もなく、ひじり私僧となつて本山から離れてゆくのである。

叡山の黒谷と言えば……と、明遍は重源と別れて寝所に横たわったとき、ふと思ひあつた。

たしかあそこには葉室顯時の孫が出家しているはずであつた。

葉室顯時は高階重仲の娘と長隆との間にできた子である。この女人は、夫の長隆が夭折したあと、縁あつて亡父信西入道の妻となつた。兄の是憲や澄憲、静憲たちの

母である。つまり顯隆と是憲たちは異父兄弟の間柄だった。姉小路の信西邸へもその息子行隆を同道してよく訪れたものである。

顯時、行隆の父子に聞けばその源空とやらいう僧のことを調べ出せると明遍は考えた。

遁世を志す明遍にとって、やはりこうした在野のひじり、それもすぐれた私僧は無関心ではおれなかった。いったいどんな男なのであろうか。

三

それにしても俊乗房重源とは不思議にエネルギー的な僧であつた。

光明山に四日間ほどいた明遍は、すっかりこのエネルギーに魅惑され、同化させられてしまった。

重源はくり返し明遍を説得した。遁世などと称して、世に背を向けるのは因循姑息、怠惰と同義語だ。良く言つたとしても女々しいセンチメンタリズムにすぎない。男なら、ひじりなら、その持てるエネルギーを全部ぶちまけなければならない。

「立身栄達のためではない。救うのだ。この乱世を救うのだ」

口角泡をとばして力説する。

重源も紀氏という筋目正しい出身であった。権臣紀長谷雄の末裔。滝口左馬允季重の四男で、俗名は刑部左衛門重定。醍醐寺で出家したと聞いた。

しかし入宋したことを、いっこうに僧としてのキャリアに活用しないところを見ると、彼もまた桑門内での立身出世を捨てたひじりなのであろう。

「救えと言うがなぜ、いつ乱世が来るのだ」

明遍は反問する。

「いや来る。近く必ず世の中は乱れに乱れる。わしは宋へいって、この眼でまざまざと見たのだ」

「あちらの乱世はどんな具合か」

「長安の都。一世を誇った仏都だった。それが唐の武帝のころは見るかげもなくなったそうだ」

「会昌（八四五）の廃仏毀釈——」

「うむ。僧寺六十四、尼寺二十七に及んだ伽藍がすべてこわれ、残ったのは大慈恩寺以下わずか四カ寺。僧の数も百名そこそこに減殺された。日本から入唐僧が途だえたのもそのためだ」

「重源殿たちが久々の渡航だったとか」

「さよう。百年ぶりのことだ。武宗帝廃仏の傷跡を癒や

したものが何だったか、明遍殿、わかるか」

「……………」

「宋の仏教がだな、帝王貴族のものから庶民大衆のものへ移ったからだ。そこから立ち直ったのだ。大衆の零細な寄附で寺は再建された。もちろん帝王も寄進したが、それは一部にすぎない。今日にある南部北嶺。すべてが宮廷や権力者に依存している。こんな時代はじきに去る。仏法も乱世の渦へ巻きこまれるのだ。そのとき仏法も支えるものは何か」

「何がこれを支えるのだろうか」

「ひじりだ。私僧たちだ。このひじりを支持する庶民大衆じゃよ。ひじりは彼ら大衆を救わねばならない。その先頭に立たねばならない」

重源は熱っぽく力説する。

これが新しい外来思想というものののだろうか。

明遍は不思議なものを見つめる眼で、重源の情熱に当惑した。わからぬ部分が沢山残るのである。

光明山へきて四日目の朝。明遍はとにかく高野の蓮華谷へ帰ろうと思ひ立った。支度をととのえて境内をよぎってゆくと、すでに工事場で指揮を取っている重源に呼び止められた。

「帰るのか」

「帰る」

「わしも一度、高野を訪ねたい」

「待っている。蓮華谷という別所を、聞いて来られるがいい」

「帰る前に一つ頼みがある」

「何だ」

「今日これから半日ばかり閑をつぶしてもらいたい」

「どこかへゆくのか」

「五条まで同道して欲しい」

「五条へ？」

「錢だ。この七重の塔造立のために錢が要る。わし一人の顔ではなかなかにもらい憎い。信西少納言の遺児である明遍殿なら、その顔はさらに大きくなる」

「五条のどこへゆくのだ」

「大福長者の邸だ」

「大福長者……と言うと右京大夫」

「今はもう五条大納言だ。邦綱卿の邸だ」

「……」

明遍は絶句した。

あの大福長者の邦綱か。父の信西は臨終の場で言い切

った。自分をこんな窮地に追いこんだ張本人は四位ノ右京大夫だと。

そのことを俊乗房重源は知っているのだろうか。

「なぜわしがゆけば、大福長者に顔が良くなるのか」

「借りがあるからだ」

「借りが——」

「そうだろう。大福長者は信西入道と聞けば財布の紐をとくはずだ」

知っている。重源はちゃんと知りつくしているのだ。

大福長者の弱味を。

「しかし庶民大衆の手で仏法を支えたと主張するおぬしが、大納言の財力をあてにするとは、ちと面妖ではないか」

「何が面妖なものか。持っている者からはどんどん吐き出させることだ。邦綱卿は、とにかく清盛殿への付け届けに三百六十五日、毎日変った品を、一日も欠かさずに届けたそう。わしの渡航の金もあの長者から出ているんだ」

「そのかわり重源殿は、だいぶ新しい品物を仕入れてきて、大福長者のふところを肥やしたのではないか」

そんな噂も耳にはいっていた。重源は仏典なぞ持ち帰

らず、もっぱら対宋貿易の話を取りきめるために三度も入宋したそう。

「そんなことはどうでもよい。この七重の塔がだいじだ」
笑い飛ばして重源はけろりとしていた。相当なタマだ、と明遍は内心舌を巻いた。

「よろしいといってみよう」

「いってくれるか」

重源はよほど嬉しかったのだろう。明遍の周囲を眺ねまわっている。

あの宵に一度だけ顔を合せた赤ら顔で、でっぷりと肥った大福長者だ。宋へ渡る砂金船に明遍を乗せてやろう。と確約したまま絶えて会っていない。再会したら、邦綱はどんな顔をするだろうか。

明遍は興趣が強く動いてくるのを感じた。

五条の大路は、あたかも大納言邦綱邸のために通っているかのようにあった。それほど宏大で、築土の瓦の一枚一枚にも贅美がこらしてあった。

今をときめく平氏一門の大スボンサーである。その愛娘は、清盛の寵児三位中将重衡の正妻となっている。かつては雑色にすぎなかったこの邦綱を頼って、藤原一門は辛うじて政界で命脈をたもっている始末だ。

重源と連れ立って明遍は、邦綱に面会した。

「おお、小禅師殿か。久々で」

開口一番、邦綱はソツのないお愛想を発した。赤ら顔は昔のままだが、口辺にたくわえたナマズ髭に、何やら貫禄のようなものがにじみ出ている。

「あれから十二年がすぎました」

明遍は淡々と言った。

「さよう。お父上が非業なお最期をとげられてから、もう十二年のう。小禅師殿はご一門の八講に欠席なされたとか」

さすがは政略家だ。信西一族の追悼会のことを、ちゃんと知りつくしていた。

「遁世の身ですので、暗れがましい座はご免こうむっております」

「いやいや、南部随一の学匠の噂はとくに聞き及んでおる。最勝講の講師に是非と法皇もご熱望だ。その都度おことわりになっているそうだが、来年はひとつこの邦綱に免じて出講頂けまいか」

かたわらの俊乗房重源が用件を切り出せぬほど、五条大納言は次々に話題を発展させてゆくのだった。

(つづく)

浄土宗の宝物

知恩院経蔵

知恩院にみられる国宝建造物が多い。先に紹介した三門・勢至堂をはじめとして御影堂・大方丈・小方丈・唐門・それに経蔵である。このうち勢至堂を除き全て江戸初期のもので桃山様式を備えたものである。

ここにあげる経蔵とは経を納めるお堂のこと、又堂の中心に軸を立て八面の経架を設け、これに一切経（経・律・論の三蔵およびその注釈をふくめた仏教聖典）を納め回転する装置がついているところから輪蔵・転輪蔵ともいわれる。目立たないが寺院においては貴重な位置をしめる建造物である。僧侶の学問、知識の根源であり、宗祖法然上人は五千余巻にも及ぶ一切経を五度までも読み返したといわれる。

写真の経蔵は一六一五年（元和元）、の創建で徳川秀忠の建立による江戸初期の建築、桃山時代様式がとり入れられている。御影堂の前方東側に位置し、樹林の山を背にし正方形の石盤上に立っている。重層宝形造、本瓦葺で頂上に宝珠を頂

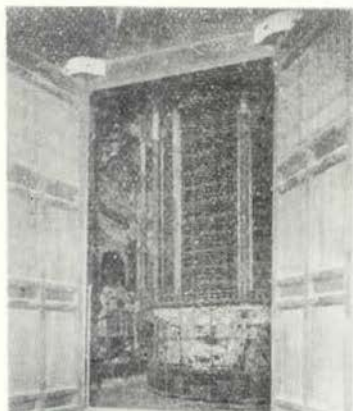
く、重荘感のある建物である。下層の柱は五間の外周りに一列に配され、内側三間が本屋となっている。入口は四方に造られ正面は双折両開き背面を除き三方入口脇には花頭窓を設けている。料拱・扇樺・海老虹梁・棧唐戸・花頭窓等はほとんど唐様手法を用いており三門と同様に純唐様建築に属すが、全体的には和様式がおりこまれている感がある。内部の天井は虹梁による鏡天井・床は瓦敷、中央には八角殿の経架を造り、宋国開元寺版三大蔵経五千六百巻余りを納めている。八角殿は輪蔵にて中軸をもって廻転する装置があり、経架下方周囲には八天部推輪の状態を現わしている。天井を始め上方一帯には極彩色を用い天井には奏楽天人を下方壁面には草花・鳳凰・雲間靈獸などを描いている。又正面入口には仏工康猶法印の作による傳大士及び脇土普賢成二童子が安置されている。

知恩院経蔵のように石壇上に立つ重層宝形の経蔵は最も普通の形式で、醍醐寺、法隆寺、唐招提寺など多数見られるが下層外周りを柱を遊離したもののはめずらしい。御影堂が和様を主体に唐様の様相をみせているのに対し、唐様建築に属す経蔵が逆に和様の様相をみせているのもおもしろい。明治三十三年四月特別保護建造物に指定された。

（佐々木洋之）



知恩院経蔵（国宝）



同 内 部

「浄土」購読規定		一部 定価 百三十円 (送料十二円)		会費一カ年金一、五〇〇円 (送料不要)		浄土 七月号		昭和十年五月二日 第三種郵便物認可		昭和四十九年六月二十五日 印刷 昭和四十九年七月一日 発行		定価 百三十円		編集人 宮林昭彦 発行人 佐藤密雄 印刷人 関二三男 印刷所 三幸社印刷所		東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六 発行所 法然上人鑽仰会 電話東京二六二局五九四四番 〒一〇二 振替東京八二一八七番	
-----------------	--	-------------------------------	--	--------------------------------	--	---------------	--	------------------------------	--	--	--	----------------	--	--	--	---	--

昭和十年五月二日
昭和四十九年六月

一種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
印刷 昭和四十九年七月一日発行

弊会発行の恒例教化トラクト

『お ぼ ん』

新書判・表紙共 12 頁

定価 一部 18 円 (200 部以上 16 円)

送料・実費

“おぼん・せがき会の施本に好適です”

諸経費高騰の折から、今般価格は多少値上げさせて頂きました。
お早めにご注文を頂けますれば幸甚です。

浄
土

第
四
十
七
号

第
七
号

定価金百三十円(送料十二円)

浄土宗開宗八百年記念トラクト

『法然上人と浄土宗』

B6判 96頁 定価 180 円 (〒 70円)

(200部以上 単価160 円 送料実費)

内 容

第一編 法然上人のあゆみ

第二編 浄土宗のおしえ

第三編 信徒の心得

附 法然上人略年譜・参考文献

開宗八百年の聖辰を迎えました。本会ではこの慶祝を期しトラクトを作成いたしました。檀信徒用施本・慶讃法要記念品などとして広くご利用下さい。

〒102 東京都千代田区飯田橋1-11-6

発行所 法然上人鑽仰会

電話 (03) 262-5944 番